一般財団法人日本不動産研究所 ㊽

全国 市街地の変遷

――昭和の記憶から次代へ

北九州市・5市合併で誕生してから55年

九州初の百万都市、旧市の名残引き継ぐ

工業と環境で課題解決を

総務省が発表した17年人口移動報告によると、福岡県内では福岡市が全国4位の8678人で九州最多を記録し、周辺市を含めた福岡都市圏への転入が目立った。一方、北九州市では小倉北区が転入超過となったものの、市全体では全国市町村で最多の2248人の転出超過となった。1963年に門司市、小倉市、八幡市、若松市、戸畑市が合併して誕生した北九州市は当時人口約102・4万人で九州初の百万都市となった。それから55年の節目を迎えた18年、人口は95万人を割り対策が講じられているが、減少の波にあらがうことは容易なことではない。

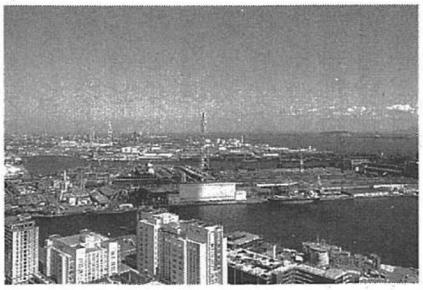
唯一転入超過となった小倉北区の中心部と小倉駅（右）

製鉄所が世界遺産に

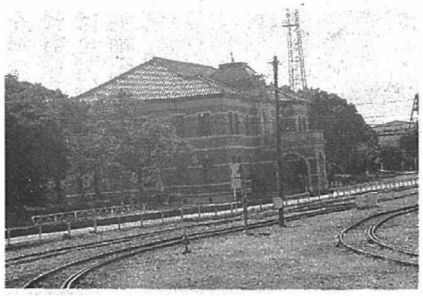
北九州市を語るうえで工業地域は欠かせないが、15年7月5日、「官営八幡製鐵所」が第39回ユネスコ世界遺産委員会で世界文化遺産（「明治日本の産業革命遺産、製鉄・製鋼、造船、石炭産業」）に登録決定された。日本の近代化の礎を築いた製鉄所は今なお引き継がれ、「ご安全に」という言葉が毎日挨拶代わりに用いられている。

北九州市の歴史を紐解くと、旧5市は歴史が異なる一方で、いずれも日本の重要拠点であったことに驚かされる。軍都だった旧小倉市をはじめ、港町として繁栄し、今では観光名所「門司港レトロ」を擁した旧門司市、石炭の積出港として栄えた旧若松市、それぞれが強い個性をもって日本を支えたのである。

旧5市合併の名残は今もなお引き継がれ、「区民（旧5市）感覚」に近い意識が根付いているように思われる。例えば旧門司市は合併に際し関門海峡を挟み、友好関係にある下関も仲間になるならと、他県を巻き込んだ一幕もあったといわれ、今でも門司区民は下関に出かけることが多いと聞く。石炭の積出港だった若松区でも洞海湾を隔てた半島であるが故に、他の区民からはどうしても遠いといった感覚を拭えないでいた。



㊤北九州港（小倉北区）



㊦製鉄所の産業遺構のある八幡東区

しかしながら、若戸大橋に加え若戸トンネルが開通してアクセスが増したことで、工場や物流施設などの企業進出が見られ、現在は北九州市が目指す環境首都の代表格である「北九州市エコタウン」が若松区にあることを挙げておきたい。工業都市と環境都市が両輪となって、北九州が全国・全世界から良い意味での脚光を浴びる機会が訪れることを願うばかりである。

産業基盤など生かせ

日本の地方都市は、確実に高齢化と少子化による人口減少の一途を辿っており、北九州市も例外ではない。一方で、先人が思いを馳せて立地した「官営八幡製鉄所」があったこの街で、災害のリスク回避を目的とした企業進出があることには注目される。

衰退する街並みと人口減少という日本の地方都市が抱える課題に対し、衰退が加速するばかりと悲観するのではなく、自然環境が豊かで、交通インフラなどにも優れ、世界に名だたる企業もあり、産業基盤も厚い。そんな都市はそうそうない、誇りある街として、北九州市は、課題解決の先駆者となってほしい。

（日本不動産研究所北九州支所、不動産鑑定士・松尾春仁）